

大阪猪飼野、朝鮮人街の来歴と現在
—金石範の『火山島』を中心に—

漢陽大学大学院国語国文学科博士課程

イ・チュンヒ

在日朝鮮人の小説家である金石範(キム・ソクボム、1925-)は大阪に生まれ、朝鮮文学の長編小説『火山島』を日本語で執筆した。彼は大阪生まれだが精神的な故郷である済州道に、いつも関心を持っていた作家である。『火山島』は済州島(現在、済州道)の「4・3事件」において、国家権力に抑圧されて、弾圧を受けた済州島民の実像と国家の暴力的な姿をそのまま見せている作品である。主人公のナム・スンジは済州島生まれだが中学生の時、日本へ渡って神戸と大阪で育った人物で、肉体的な故郷である済州島を再構成するため、大阪に家族を残して故郷である済州島に戻ってくる。

『火山島』は済州島だけでなく、大阪の猪飼野も主要な背景である。猪飼野は、主人公ナム・スンジが物理的な時間を送った故郷であり、在日朝鮮人たちの故郷でもある。朝鮮植民地の時代に実際に数多くの済州島出身の朝鮮人たちが祖国を離れて大阪に定着する。彼らにとって大阪は生活の基盤であり、同時に失われた祖国を思い浮かべる空間を象徴する。小説に登場する大阪の猪飼野は、日本という国家の領土内にありながらも、国が付与するアイデンティティに収容されない朝鮮人の空間である。

現在、猪飼野は行政区域上、生野区に属する。1920年代の大阪は平野川の度重なる氾濫により開墾地開拓のための労働者を必要としていた。その際、全羅道(済州島を含めて)と慶尚道から多くの朝鮮人が大阪に移住した。1945年以降になると、朝鮮国内の政治的なイデオロギーによって、多くの人々が逃げるように大阪に渡る。当時、済州島とを結ぶ定期船に乗って多くの朝鮮人が大阪に渡り、定着することになる。

本発表では、まず大阪猪飼野という空間の歴史を確認する。大阪猪飼野がどうして在日朝鮮人にとって重要な空間になったのか調べる。次に小説『火山島』で描かれる猪飼野がどのような空間なのかあるのか見ていく。小説内で大阪猪飼野は在日朝鮮人の象徴的な空間として描かれる。猪飼野で国家は存在しないように見える。彼らに猪飼野は、自分たちの文化と伝統を守りながら生きていく空間に過ぎない。しかし、国家という権力が届かない場所はどこにもない。国家と民族という観点で彼らを見ると、すぐ彼らの生活と衝突が起きる。そのため小説に描かれた大阪猪飼野の姿を見て取り、それがどのような意味と象徴を持つのか、そして現在の猪飼野の姿はどういうものか考察したい。